



金正喜（キム・ジョンヒ/1959-）日本初個展である。金は今回、段ボールを支持体にウレタン塗料を顔料とした中/大型作品《2013 Thing》を、10点展示した。

私は金から依頼を受けて、リーフレットに文章を寄稿した。本来ならアトリエを取材するのだが、日程的にどうしても韓国に向かうことが出来なかった。また、近年私は絶対的な想像力を用いれば、時間と空間を超克できるのではないかと考えている。そのため、写真資料と金のスチューツメントから文章を作成した。

金は「美・欲・物」を主題として制作を行い、資本主義という現実を受け止める。描くのではなく、引っ掻くことによって、器の形を形成する。器は完璧な姿の象徴である。このような金の作品に対して、段ボールが再生を繰り返す無名者であり、資本主義の中で「我々は売春婦のように一人一人が商品として存在する」（W・ベンヤミン）事象と酷似すること、引っ掻くことで発生するキズは、W・ベンヤミンのいう礼拝的価値とJ・ボードリヤールのいうフェティッシュに通じることなどを指摘した。

実際に作品を目の前にすると、私は自分が考えたことは否定しないが、それ以上に、多くの発見があった。まずはウレタン塗料で着色することによって、キッチュな雰囲気ができるのかと思いきや茶は大地、黄は太陽、赤は炎、青は水といった、自然物そのものの要素が含まれていることに大いに驚いた。特に六枚を合わせた作品は、鉛か水銀、真鍮か金属のような輝きに満ちていたのだった。人間のやることなど、自然から見ればちっぽけなものだ。人工物は、自然物から逃れられないという本質を、金の作品から感じた。次に、段ボールと言う素材をこれ程、自在に操れることに感銘を受けた。日本の現代美術では、どうしても日本画、油彩、彫刻といった既存の枠をなかなか壊すことができない。すると、素材に対しても何かしら乗り越える力を発揮することが難しい状態にある。現代美術には本来、素材に対しても、対峙しながら楽々とその質感を変容させる能力がある。日本の現代美術の探求は終わっていない。まだまだ幾らでもある。それは私が実物を見ていなかった事だけではなく作品から批評は果てしなく生まれるのだ。

